

漢法苞徳塾資料	No. 263
区分	治療論・補瀉
タイトル	補瀉の決定問題
著者	八木素萌
作成日	1991.07.16

A：補瀉決定の為の判断基準三つはイコールでは無い～

何れに従うかの問題が重要……

『難経』「八十一難」には、補瀉の決定は脈の虚実に従うのではなくて病の虚実に従って行なえと述べている。そこで、病の虚実とはどう言うことかについて、「四十八難」に「三虚三実」として「脈ノ虚実・病ノ虚実・診ノ虚実」に関する記述があるのであろう。

「脈の虚実」は「病の虚実」と同じである、と考えているのならば、『難経』「八十一難」のように言うのは、ツジツマの合わない話である。記述の内容から「診ノ虚実」は「切診〈＝触診〉によって明らかになるところの、体表部における皮毛・筋肉の状態の情報を、虚と実とに判断している」事であるのは明らかである。

「四十八難」で言っているのは「脈拍・脈状の虚実」と「病症の虚実」と「診の虚実」など、それぞれについて、どのように虚実を判断するのか、その基準＝尺度を明らかにする説明である。

それを見ると「脈」「切診」「病」の三者の虚実判断の尺度が異なっていることが分かる。

「四十八難」に

「…脈ノ虚実トハ 濡ノ者ハ虚ト為シ 緊牢ノ者ハ実ト為ス…」

「…病ノ虚実トハ 出ズル者ハ虚ト為シ 入ル者ハ実ト為ス 言ウ者ハ虚ト為シ 言ワザル者ハ実ト為ス 緩ハ虚ト為シ 急ナル者ハ実ト為ス…」

「…診ノ虚実トハ 濡ノ者ハ虚ト為シ 牢ノ者ハ実ト為ス 痒ハ虚ト為シ 痛ハ実ト為ス 外痛ミテ内快ヨキハ 外実シ内虚ス 内痛ミテ外快ヨキハ 内実シテ外虚スト為ス……」

と記述されている。

- (1) 「脈の拍動がベツタリ〈力無く〉と柔弱なのは虚であるが、緊張して牢固であるものは実である」と述べている、つまり「ヤワラカ」か「カタイ」かが問題の尺度である。
- (2) 「内発的な病気〈＝内傷病〉は虚、あれこれと言うものは虚、緩慢なものは虚」「外感病は実、言わないものは実、急なものは実」と言うのであるから、「病気の虚実」と言う場合の基準・尺度は、「内傷病・症候が緩和なもの・病態の変化が緩慢なもの」は「虚」であり、「外感病・症候が激しく苦痛も大きいもの・病態の変化が急迫しているもの」は「実」である、と言うのである。

(3) 切診の虚実の尺度は、虚の場合には「濡の場合・痒のもの」、実の場合には「牢のもの・痛のもの」であり、按压して外表が痛く内奥部の方は快く感じるのは「外実・内虚」の状態であり、表面は快く感じられるのに内奥の部は痛く不快であるのは「外虚・内実」の状態と言う。つまり、凝りは実だが、張りがなく軟弱なものは虚である、按压して痛むのは実だが、痒みがあるものや按压を快く感じるのは虚である、と言うのである。

このように、「脈」「病」「診」の三者それぞれが、別の「モノサシ」になっているのである。臨床にさいして「補瀉」を決定する時にはどの「モノサシ」によって判断する事が正しいのか・臨床的により良く効果的であるのはどちらか?と言う問題が生じているのである。だから「補瀉は脈に従うのではなく病そのものに拠れ」と言う「八十一難」が書かれなければならなかったのであろう。

B：補す場合と瀉す場合……

この「四十八難」の記述は『黄帝内经・靈枢』・卷二・根結第5の

「形氣不足 病氣有余 是邪勝也 急瀉之 形氣有余 病氣不足 急補之 形氣不足 病氣不足 此陰陽氣俱不足也 不可刺之……形氣有余 病氣有余 此陰陽俱有余也 急瀉其邪 調其虚実故曰有余者瀉之 不足者補之 此之謂也……」

(形氣ノ不足シ 病氣ノ有余ナルハ 是レ邪ノ勝ツモノ也 急ギ之レヲ瀉セ 形氣ノ有余シ 病氣ノ不足ナルモノハ 急ギ之ヲ補ナエ……形氣ハ不足シ病氣モ不足ナレバ 此レ陰陽ノ氣ノ俱ニ不足セルモノナリ 之レヲ刺スコト可ナラズ……形氣ノ有余シテ 病氣モ有余ナルモノハ 此レ陰陽ノ俱ニ有余ナルモノナリ 急ギ其ノ邪ヲ瀉シテ ソノ虚実ヲ調エヨ 故ニ有余ナレバ之レヲ瀉シ 不足セル者ハ之レヲ補ナエト曰ウハ 此レノ謂ナリ……)

とある文と関連していると見られる。

上の『黄帝内经・靈枢』・卷二・根結第5の記述を表にすると

『黄帝内经・靈枢』・卷二・根結第5の記述

形氣の虚実	病氣の虚実	施治の補瀉
形氣 不足 (虚)	病氣 有余 (実)	是邪勝 急瀉之
形氣 有余 (実)	病氣 不足 (虚)	急補之
形氣 有余 (実)	病氣 有余 (実)	陰陽俱有余 急瀉其邪 調其虚実
形氣 不足 (虚)	病氣 不足 (虚)	*1 陰陽氣俱不足不可刺之

*2 故曰有余者瀉之 不足者補之 此之謂也

作表・八木素萌

- * 1. 「陰陽氣俱不足 不可刺之 刺之則重不足 重不足則陰陽俱竭 血氣皆尽 五臟空虚 筋骨髓枯 老者絶滅 壯者不復」

(訓み下し)

陰陽ノ氣トモニ不足スレバ 之レヲ刺スコト不可ナリ コレヲ刺セバ重ネテ不足ス 重ネテ不足セシムレバ陰モ陽モトモニ竭キ 血氣ハ皆尽クサレテ 五臟ハ空虚シ 筋モ骨髓モ枯ルレバ 老者ハ絶滅シ 壯者ハ復サズ……

(訳)

〈形気も病気も不足状態にあるものは〉陰の気も陽の気も共に不足の状態にあるのだから刺してはいけません、もし刺せばさらに不足の状態を重ねてしまう事になります、これでは気も血も全て尽きてしまいます、その為に五臓と言う五臓はカラっぽになり、筋肉も骨髓も乾いてしまいます。それで、老人は殺される事になります、まだ老いてはいない者でも元気を回復できない事にしてしまいます。

- * 2. 「故曰 有余者瀉之 不足者補之 此之謂也」

(訓み下し)

故ニ有余ナレバ之レヲ瀉シ 不足セル者ハ之レヲ補ナエト曰ウハ 此レノ謂ナリ……

(訳)

これまで述べましたような次第が、有余しているのには瀉してやり、不足している状態には補してやる、ということなのです。……

C：汪機『鍼灸問対』の解説

汪機の『鍼灸問対』は、『内経』のこの説を引用して注釈し、さらに説明を加えている。『難経』説の敷衍でもあると言えよう。それは「形気」を平明に説明している。

「夫レ形気トハ 氣ハ口鼻中ノ喘息ヲ謂ウモノナリ 形ハ皮肉筋骨血脈ヲ謂ウモノナリ 形ノ勝ルモノハ有余ト為ス 消瘦スルモノハ不足ト為ス 其ノ氣ハ 口鼻中ノ氣ニ審ラカニセヨ 勞役シテ故ノ如キモノハ 氣ノ有余ト為スナリ 若シ喘息ノ氣促シ 氣短ニ或ハ以テ息スルニ足ラザル者ハ 不足ト為ス 故ニ曰ク形気ナルハ 乃ワチ人ノ身ニ足ラザル者ハ 不足ト為ス 故ニ曰ク形気ナルハ 乃ワチ人ノ身形中ノ氣血ナリト 補スベク瀉スベキハ 此レニハ在ラズシテ 只ニ病ノ来潮シテ之レヲ作スノ時ニ在ルナリ 病気シ精神ノ増添スルモノハ 是レ病気ノ有余ナリ 乃ワチ邪氣ノ勝ナリ 急イデ当ニ之レヲ瀉スベシ…精神ノ困窮シ 語言ハ無力ニシテ懶語ニ及ブ者ハ病気不足ト為スナリ 乃ワチ真氣ノ不足ナリ 急イデ当サニ之レ補スベシ 若シ病人ノ形気ハ不足シテ 病ノ来潮シテ之レヲ作スノ時 病気モ亦不足ナレバ 此レ陰陽ノ俱ニ不足セルモノナリ 鍼ヲ用ウルコトヲ禁ズ 宜シク之レヲ補スニハ甘葉ヲ以ッテスベシ 已マザレバ 臍下ノ氣海穴ニ取レ…」と記述している。

この記述を現代語に訳して個条書きにして置こう。

(1) 形とは…「形ハ皮肉筋骨血脈ヲ謂ウ」…「形ノ勝ルモノハ有余」…「消瘦スルモノハ不足」…と言うのであるから

a : 形の有余

皮膚はシッカリしており・肉付きは充実しており・骨組みが良いのであり、このような体格・機能が勝れているものが、「形の有余」とされている。

b : 形の不足

筋骨・肌肉ともに貧弱で、如何にも消耗しやすい様子のもは、「形の不足」とされる。

(2) 気とは…「気ハ口鼻中ノ喘息ヲ謂ウ」…「口鼻中ノ気ニ審ラカニセヨ」…「労役シテ故ノ如キモノハ気ノ有余」…「喘息ノ気促シ 気短ニ或ハ以テ息スルニ足ラザル者ハ不足」とある。

a : 気の有余

呼吸の様子が筋肉労働の時にも変りない状態のものは、「気の有余 (=実)」と言うのである。

b : 気の不足

呼吸が如何にも気せわしく・又は呼吸が浅く早く・或はまた如何にも呼吸があえいでいると言う状態は、「気の不足 (=虚)」と言うのである。つまり、これは少しの運動や労働作業でも、すぐに息切れをしたり、呼吸があえぎやすい、浅く早い呼吸をするもの、これは、「気の虚」とされる。現代医学風に言えば、明らかに、心肺機能が低下している状態である。反対に「気の実」とされているのは、普通の労働作業や運動のような程度では呼吸に乱れは見られないもの、を指している。

D : 補スベク瀉スベキハ、コレニハ在ラズ (形気の虚実の事) …

(1) 病の不足 (虚) と言うのは、病勢は遅滞して緩慢で症候も不明瞭で発症の様子も時期も定かでは無いもの

(2) 病の有余 (実) とは、病の症候も病の変化も激甚であり、発症も明確で病勢も変転が明解なもの

★補瀉の場合の注意

「形氣ナルハ…人ノ身形中ノ氣血ナリ…補スベク瀉スベキハ此レニハ在ラズシテ 只ニ病ノ来潮シテ之レヲ作スノ時ニ在ルナリ…」この文は、補瀉を決定する上で大切な事は、体格・機能の状態の虚実よりも、病症の起こり方（発病時・発症時）の様子如何に拠るのであると、注意していることは明瞭である。故に、補瀉は病の「有余」「不足」に従わなければならない、と言う事を注意しているのである。続いて病気の「有余」と「不足」について、および、「補」「瀉」について記述している。

「病氣シ精神ノ増添スルモノハ 是レ病氣ノ有余ナリ 乃ワチ邪氣ノ勝ナリ」…「精神ノ困窮シ 語言ハ無力ニシテ 懶語ニ及ブ者ハ病氣不足ト為スナリ 乃ワチ真氣ノ不足ナリ」…「病人ノ形氣ハ不足シテ…病氣モ亦不足ナレバ 此レ陰陽ノ俱ニ不足」と述べて「補」「瀉」「鍼を用うこと不可」「氣海穴に取る」場合について説明している。

ア：「病気の不足」というのは、気力衰えて言葉には力なく、発言も如何にもモノウイ様子である、これは「真気の不足」の状態であり、「病気の不足」の状態と把握している。

イ：「病気の有余」というのは、気分が高揚しているかのように見える状態にあるものは、「病気の有余」であって「邪気が盛ん」な状態にあることを示している。

ウ：鍼を用いてはならないのは、体格・体質が虚弱で、所謂「形気の不足」の有様であり、病気もまた「精神の困窮」している「病気の不足」の状態にあるものである。これは、「補薬（＝甘薬）」を用いるべきもので、鍼してはいけない状態である。

エ：「甘薬（＝補薬）」を用いても思わしくない「形気の不足」し「病気も不足」な状態の場合には、臍下の氣海穴を取穴するのである。

E：さらに検討を要する課題

★触診の虚実も、脈診の虚実も、補瀉決定の決め手ではないという『内経』『難経』の記述と、これを敷衍した後世の記述の一つを見た。この補瀉決定論の明瞭な立場が、日本では十分に受け継がれて来てはいない。このような今日の鍼灸の状態は、江戸期の鍼灸と違って見受けられる。このイキサツの研究と考察が必要であろう。

★『靈枢』九鍼十二原第1の「…凡用鍼者 虚則実之 満則泄之 宛陳則除之 邪勝則虚之…」と言う記述は、鍼運用を四つに大分類している。ここでの「宛陳」については今日に言うところの「細絡」「血絡」であるが、「満」は解明不足で残されているので研究を要する。

私には「腫脹」「浮腫」のように、脈が「滑・*・浮」のように、「表陽」に「気停にともなって生じている腫」およびこの「腫」と関連した症状（たとえば「溢」と表現されている状態）の時に、適切な鍼法となるような方法が用いられる場合の全体を指している、と思われてならない。

★『靈枢』寿夭剛柔第6の三変刺の中の「…衛之生病也・氣痛時來時去・怫愷責響・風寒客于腸胃之中・寒痺之為病也・留而不去・時痛而皮不仁…」の状態に対して「…刺衛者出氣…」と言う刺法か？また、「寒痺之病」が「…留而不去・時痛而皮不仁…」の状態になった場合の「…刺布衣者・以火焯之・刺大人者・以葉熨之…」をも含んだものとして考えるべきか？

★『靈枢』邪氣藏府病形第4の中の「六変刺」は「脈の六変」に対応した刺法の記述であると解釈されてきている。「急ハ寒」「緩ハ熱」「大ハ多氣少血」「小ハ血氣皆少」「滑ハ陽氣盛微有熱」「濇ハ多血少氣微有寒」を示しているから、鍼は

「急ニハ深く内レテ久シク留メル」

「緩ニハ浅刺速抜〈浅ク内レテ疾ヤカニ鍼ヲ発ッス〉」

「大ニハ微カニ氣ヲ瀉スヨウニシ血が出ナイヨウニ注意スル〈微瀉其氣・無出其血〉」

「小ニハ鍼ハシナイデ葉デ補ウ〈勿取以鍼・而調以甘葉〉」

「滑ニハ小刻ミニ浅刺速抜ノ鍼ヲ行ナッテ陽氣が多イ状況ヲ瀉スヨウニシ、マタ、ソノ際ニハ注意深く出血サセナイヨウニスル〈疾カニ鍼ヲ発シテ浅ク内レル〉」

「濇ニハ先ズ鍼ヲスル部位ヲ按循シテ氣ヲ流レルヤスクシテカラ、経脈ノ流レノ順逆ニ従ウヨウニシテ、必ズ鍼ヲ経脈ニ中テテ留置鍼ヲスル。抜鍼ニ際シテハ疾ヤカニ鍼痕ヲ揉撚シテ氣が洩レナイヨウニシ、決シテ出血サセナイヨウニスル、コウシテ経脈ヲ和セシムル〈必中其脈・隨其逆順而久留之・必先按而循之・已発鍼・疾按其瘡・無令其血出・以和其脈〉」

ように施術する、このように生理的・病理的状况に応じた手技を論じている。「九鍼十二原」の記述との関連は判かり憎い。